

よろこび溢れる山 ～鋸山～

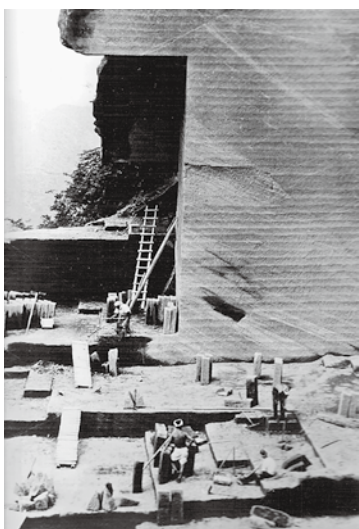
鋸山美術館館長 すずき ひろし 鈴木 裕士



1 天空の石切場

房州三銘山の一つ鋸山。古くは安房国と上総国の国境であり、現在も富津市と鋸南町の境界の山です。その鋸山で房州石の採石が始まったのは江戸期頃からと言われております。採石は当初、切出しやすい山の麓付近で行われていましたが、質の良い石を求めて徐々に上へ上へと向かい、やがて山頂付近で盛んに切られるようになりました。

鋸山の特徴である切り立った絶壁が形作られたのは、実はこの山が安房と上総くにざかいの国境だったということと深く関係しております。国境だったが故に、山頂の稜線に沿った境界部分は手をつけずに、その手前から石を切り出していった結果、垂直に聳えるダイナミックな壁面が形作られていったのです。そしてそれは多くの石工たちの気の遠くなるような時間と労力によるものなのです。



2 日本の近代化を支えた石

当時の石工は一人で平均一日8本の石を切出したそうです。「尺三」という企画しゃくさんのサイズに切られた石の重さは約80kgで、山頂付近の石切場から麓まで人力で降ろします。山頂付近の急勾配の斜面では地形を滑り台のよう

に造作し、石を滑らせて降ろしました。この滑り台のような道を「樋道といみち」と言います。また勾配が緩やかになった中腹から麓まではネコ車と呼ばれる荷車に石を載せて人力で降ろします。ネコ車には石を三本載せ、合計で約240kgもありました。ネコ車を引く人は「車力しゃりき」と呼ばれ、驚くことに何とそれは女性の仕事でした。「車力」は中腹で石を乗せ運び、麓で石を降ろすと、また空のネコ車を背負って中腹まで戻ります。この作業を一日三往復行っただと言われております。今では登山用に利用されている「車力道しゃりきみち」ですが、登るだけでも大変なのに、重いネコ車を背負って登るのは石を降ろすのと合わせ、過酷な仕事だったわけです。

麓まで降ろされた石は金谷港から船で東京や京浜地区に運ばれました。江戸から明治、そして大正へと日本が急速に近代化を進める中で、房州石は大きく需要を伸ばします。横浜の開港、お台場の整備、皇居の造営、そして急速に発展する首都圏の都市基盤の整備になくてはならない建材として貢献します。明治から大正にかけての最盛期には年間で56万本の石がこの山から切出されました。当時金谷の村には30軒ほどの石の元締めがあり、村民の約8割が何らかの形で石の事業に関係のある仕事をしていたと言われております。まさに金谷は石のまち。石により経済が回っていたと言っても過言ではなかったのです。

しかし、房州石の採石は時代の流れの中で衰退の兆しが見えてきます。大きなきっかけ



は大正12年の関東大震災でした。鋸山の石切場も甚大な被害があり、ある丁場では、昼休み中の石工が落盤の被害にあったそうです。また当時、急速に普及が進んでいたセメントにより石の建材としての地位が取って代わり始めました。震災後は石屋の数も激減し、戦後まで続いていた石屋はわずかでした。そして約300年近く続いた石切りの歴史ですが、昭和60年に最後の元締めが事業を終了し、鋸山の房州石採石は幕を閉じました。

3 ナチュラルミュージアム

しかし、その後、鋸山に残る数多くの石切場の遺構は観光資源として新たな脚光を浴び始めます。きっかけは全国的に活動している石の研究者の方々との出会いでした。金谷を訪れ、鋸山の現地調査を重ねた結果、石切場はそのスケールの大きさから日本で最大級の石切場遺構であるとの評価をいただいたのです。その後、専門家や研究者の方々の協力により、房州石の調査や他の地域の石文化発表の場として「金谷石のまちシンポジウム」を毎年開催しており、令和元年に第11回目を数えるに至りました。この研究の成果により鋸山の房州石の採石の歴史は全国の専門家からも注目されるようになったのです。2020年の日本遺産には惜しくも採択されませんでした。神秘的な石切場や鋸南町側にある関東最古の聖武天皇の勅願寺である日本寺の魅力と合わせ、多くの観光客が訪れる南房総でも屈指の観光スポットとなっております。

石工たちは当時ツルハシなど簡単な道具しかなかったにもかかわらず、その石切の跡は正確に驚くほど垂直に削り取り、その壁面の見事な造形美は時代を超え、見る者を魅了しています。私たちはこの石切場群をナチュラルミュージアム（自然の博物館）と呼んでおります。国内のみならず海外からも多くの観

光客がその魅力に惹かれ訪れており、周辺の町はその恩恵にあずかっています。

4 よろこび溢れる山

以前、鋸山は外国人が好むDeep Japanランキングで全国第2位になったという新聞報道がありました。事実、年々鋸山を訪れる外国人は増えております。外国人が好む日本の魅力の要素として①自然②田舎③スピリチュアルがあると言われておりますが、鋸山の魅力はこの全てを内包しているということです。

その鋸山ですが、昨年9月に襲来した台風15号によりかつてない程の甚大な被害を被りました。三本ある全ての登山道が倒木や土砂崩れで全て通行不能となったのです。おびただしい数の倒木は幾重にも重なり、土砂崩れも至る所で発生しました。観光で成り立っている金谷の町にとっては大ピンチです。

しかし、この惨状を聞き駆けつけてくれた大勢のボランティアの方々がこの窮状を救ってくれました。自発的に集まってくれたボランティアの皆さんはチェーンソーやノコギリ、スコップなど持参でおびただしい数の倒木を少しずつ処理してくれました。多い時は30名以上のボランティアが集まりました。彼らの献身的な復旧協力、そしてまたクラウドファンディングなどを通じての募金応援により通行不能であった登山道は、三本のうち二本が約四か月で開通することができたのです。今回の被災で、どれほど多くの方が鋸山を愛してくださっているか改めて強く感じました。

鋸山は高い山のない千葉県で、独特の個性を持った山だと思います。地域の宝である鋸山が、よろこび溢れる山として多くの来訪者に愛され続けることを心より望んでおり、またそのための活動を続けていきたいと思ひます。